

2018 年度FD活動報告

フェリス女学院大学 FD 委員会
委員長（学長） 秋岡 陽
副委員長（教務部長） 竹内 正彦

FD 活動の主な目的は「教員が授業内容・方法を改善し向上させること」にあり、また現代は、その活動を学内外に公表することが義務づけられています。フェリス女学院大学は、これまでも、さまざまな活動に取り組み、継続的に諸活動を推進してきました。

2018 年度は、「ライティング指導」「アセスメント・ポリシー」「授業デザイン」に関する学びのために、学外講師を招いて年 3 回の講演会を行いました。

一方、学内で 2015 年度から例年実施している本学の強みである語学教育の更なる発展を狙いとした「外国語による教授法プロジェクト」では、実際に外国語による授業を履修した学生をパネリストとして迎え、授業による効果や意識の変化などを聞くことで、課題や改善点の発見につなげる機会を持ちました。

また、学修行動調査も例年通り実施し、学生の学修行動の実態、変化を把握しました。

目次

1. 外国語による教授法プロジェクト	1
2. 大学 FD 講演会 報告	
第 1 回 ライティングセンターにおける指導～津田塾大学に学ぶ～	6
3. 大学 FD 勉強会 報告	
第 1 回 アセスメント・ポリシーを考える～コモン・ルーブリックの原理と可能性～	11
第 2 回 授業デザインとシラバス作成 -授業アンケート結果を踏まえて-	16
4. 学修行動調査	20
5. 教育の質向上に向けた取り組み	
授業アンケートと授業改善計画	21
ルーブリック作成	21
卒業生調査	21
PBL 科目の推進	23
シラバス改善	23
6. 2018 年度活動内容	23

日時:2018年10月24日(水) 17:10~18:40
 会場:緑園キャンパス CLA棟 3階 2303教室
 題目:外国語による授業展開の効果について考える
 ~履修者の声をもとにした検証と今後~

講演会チラシ

外国語による授業展開の効果について考える
 ~履修者の声をもとにした検証と今後~

◆日時 : 2018年10月24日(水) 17:10~18:30
 ◆会場 : CLA棟3階 2303教室
 ◆対象者 : 本学教職員・学生

今回のFDワークショップは、学生参加型としています!
 「外国語による授業」の履修経験のある学生をパネリストとして迎え、
 会場による質疑や自由参加型の発言と検証を通じて、
 授業や授業法の開発につなげることを目指します。

◇タイムテーブル◇
 17:10~17:15 開場
 17:15~17:55 第1部:学生パネリストによる発表
 17:55~18:05 質疑応答
 18:05~18:40 第2部:ラウンドテーブル
 18:30 閉場

パネリスト:大畑 甲太 教授(文学部英語英米文学科・英語責任者)
 学生パネリスト:15AA061 大東 日夏乃(英語英米文学科4年)
 15AC099 村岡 みさき(コミュニケーション学科4年)
 16CA401 佐渡 朝霞(国際交流学科4年)
 15BE029 松井 千紗(演奏学科4年)

ファシリテーター:大畑 甲太 先生
 文学部英語英米文学科教授
 幹事:英語教育 広報課長(第二専攻担当)

プログラム

17:15~17:55 第1部:学生パネリストによる発表
 17:55~18:05 質疑応答
 18:05~18:40 第2部:ラウンドテーブル(意見交換・ディスカッション)

開会挨拶 : 秋岡 陽 学長(大学FD委員会委員長)
 竹内 正彦 教務部長(文学部日本語日本文学科教授)
 ファシリテーター:大畑 甲太 教授(文学部英語英米文学科・英語責任者)
 学生パネリスト:15AA061 大東 日夏乃(英語英米文学科4年)
 15AC099 村岡 みさき(コミュニケーション学科4年)
 16CA401 佐渡 朝霞(国際交流学科4年)
 15BE029 松井 千紗(演奏学科4年)

対象者 : 本学教職員、学生
 出席者 : 専任・嘱託教員16名
 (英文1、日文2、コミュ2、国際5、音楽3、演奏3)
 非常勤講師1名(国際)
 職員12名

第1部:学生パネリストによる発表

大畑教授から学生に対し、事前アンケートに基づく質問がなされ、次のとおり発表があった。

(1) 外国語による授業を履修した感想、よかったことや苦労したこと

大東:1、2年次に履修した際は、ネイティブな英語に慣れておらず、聞き取りに苦労した。また、英語で書かれたシラバスを見て履修をためらうこともあった。しかし、インテンシブ・コースなどで徐々に英語運用能力を高め、3年次以降は困ったことはない。ネイティブの先生の授業は、お話を聞くだけでも勉強になり、日本語が堪能な先生の場合、日本語と英語の表現の仕方の違いなどを教えてくれるため非常に興味深かった。

村岡:集中的に英語を学び、自分から「英語を使って自身の考えを発信すること」を何度も授業で練習したので、「読む・聞く・話す・書く」といった4技能全てにおいて、レベルアップしていることが実感できた。

佐渡:“英語を学んでいる”という感覚ではなく、“興味のある分野について学ぶ”という感覚だったので、その分野について学習しつつ、英語も自然に身に付けることができたのがよかった。また、日本語での講義より達成感を得ることができた。時事問題を扱う科目では専門用語が多く、その都度単語の意味を調べるので学習に時間がかかった。

(2) 外国語による授業を選択したきっかけ

大東:「英語英米文学科に入学したのならば、英語をより実践的に学びたい」と思ったことがきっかけ。インテンシブ・コースでインプットした英語をアウトプットする力を付けたいと思い、1年次から履修した。

村岡：英語に苦手意識を持っていたが、同じ科目を履修した友人が「力がつく」と言っていたので、どんな授業が行われているのか興味があったため、履修を決めた。また、評価の方法が平常点 100%であり、ハードルが低く感じたことも理由の一つ。もし、テスト 100%だったら履修しなかった。

佐渡：外国語で開講されていることにはこだわらず、内容に興味があったため。また、英語「を」学ぶのではなく、英語「で」専門分野を学ぶ機会は大学ならではだと思ったため。

(3) 「語学科目」との違いについて

村岡：語学クラスは履修者の学年もレベルも基本的には同じだが、講義科目は履修者の語学レベルがばらばらで、帰国子女やインテンシブ・コースで上位クラスに所属している学生も多数おり、刺激を受けた。また、語学のクラスでは、宿題の答え合わせがメインであったが、講義ではその場で問題を解くことも多く、より実践的な英語が身についたと感じる。

松井：外国語そのものというよりは、科目を学ぶツールとして、外国語を実践的に使う点が異なっていると思う。講義科目では、履修者の学年が異なる為、下級生が上級生に遠慮をして発言しない場面もある。語学科目は、基本的に同学年の学生でクラスが構成されているため、学生同士が仲良くなりやすく、積極的に発言するなど参加しやすい環境である。

(4) 留学経験者の視点から、海外の大学における授業と本学の比較

松井：10 か月間、アメリカのホープカレッジに留学。留学先では、学生たちが、授業を止めてでも質問をしたり、ほとんど全員が当たり前のように毎回発言をしたりするなど、授業を受けるよりは参加をしているという姿勢が強いように感じた。フェリスでは、発言を促されることも、学生自身が発言しようとすることも少ない。システムの違いとしては、ホープカレッジでは 1 つの授業科目が週に 2~3 回開講されるので、予習復習が大変なこともあったが、学ぶことが多かった。

(5) 編入学者の視点から、他大学等の授業について

佐渡：以前に在籍していた学校では、異文化間コミュニケーションなどの分野について、外国語による授業を履修。所属していた学科が英語科だったため、そもそも外国語による授業に抵抗のない学生が多く、フェリスに比べて履修者が多かった。授業を履修したことで自分の語学力に自信がついた。

(6) 「外国語による授業」を履修した経験を、自らの学びにどのように生かすことができたか、また、今後どのように生かしていきたいと思うか

大東：英語運用能力が養われただけでなく、学んだ英語をアウトプットすることで、自分の英語運用能力に自信がついた。

村岡：英語を使えるようになると、未来が広がるのだという実感があった。授業を履修したことで、英語が苦手な自分でも、英語を使って発信することができるという成功体験となり、自信がついた。また、履修をきっかけに、知らない分野、苦手だと思っていた分野もやってみると意外と面白いこともあると分かり、興味の幅を広げて授業を選択することを心掛けるようになった。

松井：自分が履修した科目のうち、オーストラリアの歴史や文化を取り扱う科目があったが、初めて知ることが多く、そこからさらに掘り下げて学びたいという思いが生まれた。興味の幅が広がり、それからは常にさまざまな分野にアンテナをはろうと心掛けるようになった。

佐渡：たとえば、英字新聞を読む場合にも“読む”ことが目的なのではなく、“知識を得る”ことが目的になった。英語「を」学ぶことでは感じられない、自身の英語運用能力について考えるきっかけとなり、今後の課題を明確にとらえられるようになった。

(7) 今後どのような「外国語による授業」を履修したいと思うか

大東：コミュニケーションをテーマとして、座学だけではなく、学生自身が発信するような授業を受けてみたい。また、東京オリンピック開催に向けて、観光を含め日本について説明できるような授業があれば、実践的な学びになると思う。

村岡：ゼミナール形式の授業を受けてみたい。ジェンダー・環境・心理学など学問分野ごとに分かれ、英語で文献を読んだり、ディスカッションをするなど、関心のある分野と語学力の両方を深めたい。

松井：フェリスのリベラルアーツ教育の特徴を生かし、科目の幅を広げてみるとよいと思う。現状では外国語による授業に対してハードルが高く感じる学生も多いように思うが、例えば体育科目（エアロビクスなど）であれば、楽しみながら取り組むことができ、英語への興味も生まれるのではないかと。また、音楽学部の学生は、あまり外国語による授業を履修していないように感じる。たとえば他学部の学生も履修しやすいよう「外国語による合唱」の授業などがあれば、互いに刺激を受けることができ、有意義ではないかと思う。

佐渡：大人数で開講されるような、気軽にチャレンジできる科目があるとよいと思う。また、経済学など、身近で興味を持ちやすいような内容であれば、ハードルは低く感じるのではないかと思う。

学生の発表を受け、大畑教授より以下のとおりコメントがあった。

- ・ 教員としては、学生の積極的な参加を促す方法・工夫を考えていく必要がある。
- ・ 学生のモチベーションを高めることを目的として、レベル分けによらないクラス編成も考えられる。
- ・ 外国語で専門分野を学ぶ際、専門用語や意味・定義がネックになる。興味のある分野であれば、外国語であっても学びたいと思えるような積極性を養うことが課題である。

質疑応答

Q1 (教員よりパネリスト学生の発表を受けて)

学生は、授業内で発言するよう指名されると萎縮してしまう傾向にあるようだが、学期末に履修者に対してアンケートを実施すると「もっと発言したかった」というコメントが見受けられる。学生としては、どのような発言方法を期待しているのか聞きたい。

- A1
- ・ 小さいグループだと発言しやすいが、大きなグループになった途端に緊張してしまう学生が多い。初めから大きなグループを作り、その中に先生も入ってくださるとよいのではないかと。
 - ・ 発言を躊躇する学生がいるのであれば、授業と SNS を連動させるなどの工夫があってもよいのではないかと。
 - ・ 履修者同士の交流を深めるなど、発言しやすい雰囲気作りが重要であると思う。

Q2 (教員よりパネリスト学生の発表を受けて)

ネイティブの学生と日本人学生が混ざる授業について、どう思うか。そういったクラスの方がやりがいがあるなど、感想があれば教えてほしい。

- A2
- ・ 日本人だけだと、互いに遠慮しあってしまう。ずば抜けて語学力の高い学生がいた方が刺激になるし、ディスカッションなどでは進捗を引っ張ってもらいたい。また、日本人だけだと、つい日本語で話してしまう場面もあるので、ネイティブの学生がいた方がモチベーションは高く保てると思う。

第2部:ラウンドテーブル

テーマ『外国語による授業』の課題と展望

パネリスト学生の発表を受け、「外国語による授業」の今後について、新たな手法や授業展開を検討するきっかけとして、全6グループに分かれて意見交換を行った。

各グループの意見交換の内容は以下のとおり。なお、(6)についてはパネリスト学生同士のグループとし、学生ならではの視点から自由に「今後履修してみたい外国語による授業」について話し合ってもらった。

- (1) 外国語で専門的な内容を扱う場合、用語等の難易度の高さから、理解が遅れる・誤った理解のまま進んでしまうなどのデメリットも想定できる。例えば授業前半は日本語、後半は外国語とするなどの工夫が必要だと思う。
- (2) 近年本学への私費留學生が増えており、日本伝統文化を外国語で学ぶなど、留學生の視点からも履修したいと思える科目を考えていく必要があるのではないかと。
- (3) 「外国語による授業」の今後を考えるにあたり、外国語を学ばせるのか、外国語を使わせたいのか、外国の手法に倣うのか、大学の方向性を確認しながら検討する必要がある。
- (4) 英語を母語としない国の学生同士、学びあう科目があってもよいと思う。たとえば合唱の授業など、到達目標が同じであれば取り組みやすいのではないかと。
- (5) 「外国語による授業」実施のためには、あらかじめ学生に資料を渡して理解を促すなどの工夫が必要だが、教員の負担が増えることが懸念点である。
- (6) 将来の目標に繋がる科目、たとえば特定の職業に関して英語で理解を深める科目が受けてみたい。また、楽しみながら学べる科目として、Skype等で世界と繋がる、英語で流行の歌を歌う、英語によるフィールドワークなど、楽しみながら学べる科目も受けてみたい。将来の目標と楽しみながら取り組めるといふ両輪があるとよい。

上記を受け、大畑教授より、「外国語による授業」開講にあたっては、教員確保について課題がある旨説明があり、それらの課題をクリアするための方策として、バイリンガル形式やワールドイングリッシュ(英語を母語としない者同士の英語)で行う科目も視野に入れる必要がある旨説明があった。

アンケートから

【今回のワークショップについての感想等】

- ・多様な学生さんがいて、それぞれの体験や立場から話して頂き良かったです。学生の要望もたいへん貴重な意見に見えました。
- ・外国語による授業を実際に受けた学生さんからの意見を聞くことができ、今後の新たなクラス設置や授業内容についてアイデアをいただくことができた。
- ・学生の要望として、語学力アップが目的の場合と、専門科目を英語で学びたいのかで、ニーズが分かれることがよくわかった。
- ・外国語による授業を「そもそも」どうして実施するのかに関する議論のきっかけとして、学生の話聞くことでニーズを把握することができた。
- ・学生が望む授業を知ることができた。
- ・学生の意見を聞いてとてもよかった。受講する立場からの受け止め方はいろいろであったが、とても参考になった。
- ・遅れて参加したため途中からしか聞くことができなかったが、学生の生の声を聞くことができてよかった。予想しない意見(例:実技科目を英語で)もあった。実践している教員同士で意見交換もできてよかった。
- ・学生の実体験を聞くことができたのはよかった。音楽学部でも英語の授業を今後行う予定なので参考になった。
- ・学生からの意見を聞く機会を与えてくださったのは大変よかった。
- ・実際に経験のある学生から生の声が聞けてすべてが参考になった。
- ・履修学生の before-after が聞いてよかった(意識の変化についての生の声が聞けたこと)。最初は大人気で気軽にとれて、徐々に自分が話して発信せざるを得ないような環境(少人数)に移行するのもよさそう

だと思った。

【次回以降の開催テーマの要望】

- ・授業アンケート・授業評価の方法について、学生の意見を聞くようなテーマがよいと思います。
- ・日本語ネイティブの先生が日本語ネイティブの学生へ授業をしている、具体的な外国語での教授法の実践例をみてみたい。
- ・実際に授業を担当している教員から具体的な運営上の工夫を伺いたい。(外国語による授業だけでなく、ふつうの授業についてもそのようなことを話し合う機会があるとよいと思う)
- ・英語の授業に限らず、学生が考える「タメになった／面白い／刺激になった授業／どんなアクティビティがよかったか」など学習として身になったと感じることを学生から聞いてみたい。

【ワークショップの運営や進行についての要望】

- ・学生参加型のイベントをまた実施して頂けるとありがたいです。
- ・全体を通して、“大学全体”として、英語での授業実施を今後拡大させたいのかどうか、そのあたりはややつかみにくかったと正直思いました。
- ・学生がパネリストになってくださると、FDとしてのモチベーションが上がると思います。
- ・時間の割に中身が多すぎる気もした。

【第1部: 学生パネリストによる発表の様子】



【第2部: ラウンドテーブルの様子】



第1回FD講演会

ライティングセンターにおける指導～津田塾大学に学ぶ～

日時:2018年6月20日(水) 16:30～19:00

会場:緑園キャンパス CLA 棟 4階 2405教室

(意見交換会: CLA 棟 3階 2305教室)

題目:ライティングセンターにおける指導

～津田塾大学に学ぶ～

プログラム

16:30～18:10 基調講演

18:10～18:30 質疑応答

18:30～19:00 意見交換会(茶話会)

挨拶:秋岡 陽 学長(大学FD委員会委員長)

司会:竹内 正彦 教務部長(文学部日本語日本文学科教授)

対象者:専任教職員

出席者:学長

教員 13名(英文2、日文3、コミュ1、

国際4、音芸3、演奏0)

職員 19名

学生 1名(基調講演及び質疑応答冒頭のみ参加)

講演会チラシ

2018年度第1回フェリス学院大学FD講演会

ライティングセンターにおける指導
～津田塾大学に学ぶ～

●プログラム
日 程 2018年6月20日(水) 対象者 本学専任・嘱託教職員
16:30～18:10 基調講演 会場:CLA棟2405教室
18:10～18:30 質疑応答 会場:CLA棟2405教室
18:30～19:00 意見交換会(茶話会) 会場:CLA棟2305教室

●講師
大原 悦子 (おほはら えつこ) 先生
津田塾大学 ライティングセンター専員教授

<内容>
「学生の『書く力』の低下」という問題や、2020年度からラーニングコモンズが協定予定であることから、本学におけるライティング支援のありかたについて検討を進める必要があります。
そこで、2018年度第1回の大学の講演会では、「ライティングセンターにおける指導」をテーマとして行います。2008年からライティングセンターを運営し、関西大学と文部科学省大学間連携共同教育推進事業に採択されるなど、ライティング支援に積極的に取り組む津田塾大学から講師をお招きし、主に次の内容についてご講演いただきます。

①具体的な指導及び活動内容
②学生の利便性と利用促進の工夫
③今までの成果と今後のに向けた課題

津田塾大学の取り組みと成果について、直接お話をうかがえる貴重な機会です。
ぜひふるってご参加ください。

<講師紹介> 大原 悦子 先生
1982年、津田塾大学文学部国際関係学専攻、4年編入新
聞社に入社。専攻卒業後、大原本社勤務を経て東京本社副記者
として暮らしや文化のコミュニケーションなどを担当した。
帰国後の1998年にフェリス学院大学でライティングセンター専員
教授を務めた。1999年退社し、フリーランスに。
2010年より津田塾大学ライティングセンター専員教授。20
17年より同専員教授。著書に『フーディバントという経験—異質
と融合のあいだで』(岩波現代文庫)など。



基調講演

1. 津田塾大学ライティングセンターの概要

(1) 設立の背景・目的

「書く」力を養う→自分の意見を伝え、他人の意見を尊重するリーダーシップの育成
「社会人基礎力」の育成

(2) 設立

2008年度「質の高い大学教育推進プログラム(教育GP)」に採択された

「社会貢献は書く力とプロジェクト」の一環

(3) 連携事業

2012～2016年度 文部科学省大学間連携共同教育推進事業

「〈考え、表現し、発信する力〉を培うライティング/キャリア支援」を関西大学と実施

(4) 個別相談

①概要

- ・1回45分、予約制
- ・アカデミック・ライティング以外のあらゆる文書にも対応(就職関連、企画書、依頼状等)
- ・構想・下書きの段階でも対応し、書くプロセスの支援に重点をおく

②個別相談で心がけていること

- ・笑顔
ダメ出しをしないという雰囲気
- ・確認
添削指導はしないことの確認、相談の目標の確認
- ・音読
学生が自身で気づくための仕組み
- ・聴く
学生の話す力の育成にもつながる
- ・楽しむ
いいアドバイスをしようとしなない、
参加学生対象アンケートによる満足度100%

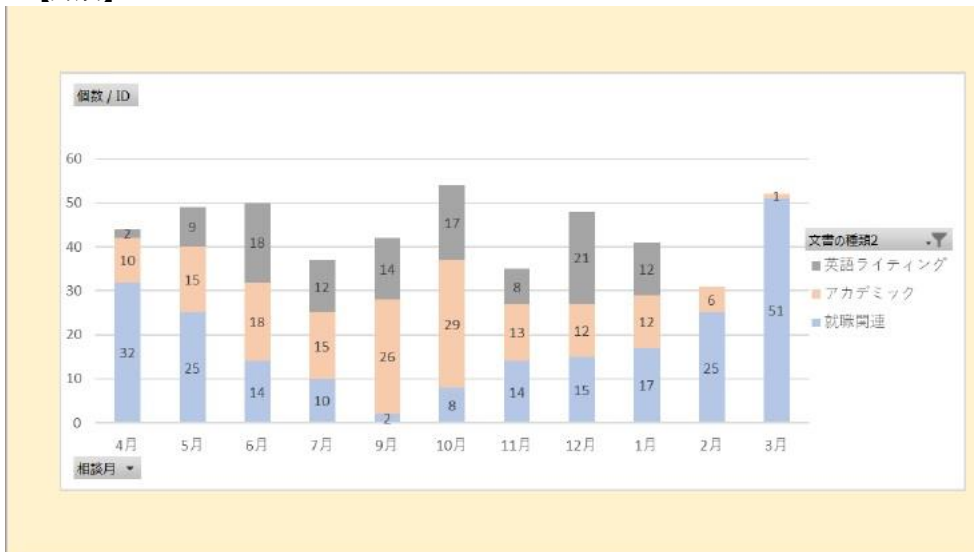
- ・柔軟性
学生の性格、ニーズ、締切等の緊急度に応じ対応
- ・共感
「そうだね」という共感、
学生の「教えてもらおう」意識を崩す手段としても有用

③相談件数の推移

【年度別】



【月別】



④利用者増に向けて

- ・入学式での宣伝
- ・Twitter の活用
- ・利用者の口コミ

2. アカデミック・ライティングの指導

(1) 相談内訳

- ・レポート
- ・ゼミ、コース志望理由書
- ・小論文 (公務員試験、教員採用試験)
- ・奨学金、留学関係申請書類

(2) 課題・レポートの相談分析

- ・2013年度の全相談（564件）のうち、課題・レポートの相談（43件を分析）
- ・3タイプに大別される
 - ①どのように書いたらよいかわからない
 - ・形式（引用や注の付し方）がわからない
→マニュアル・参考書を確認、
 - ・その過程で引用や注の意味を理解していないことが判明することも
 - ・箇条書きを文章にすることができない
 - ②何を書いたらよいかわからない
 - ・課題、授業についての理解があいまい
 - ・文献、資料の読み方、勉強の方法に問題がある
 - ・大きすぎる問いを立ててしまう
 - ・資料の検索方法に問題がある
→高校までの学習のなかで調べ方を教わる機会がない
 - ③何を、どのように書いたらよいかわからない

3. キャリア支援

(1) 就職関連（エントリーシート）の特徴

- ・リピーターが多い
- ・学生生活課、キャリアセンターとの使い分け
さまざまな観点があることを学生が理解することにつながる
- ・相談のタイプは3つに大別される
 - ①「何をどのように書いたらよいか」
 - ②「自分が書いたものが第三者に伝わるかどうか見てほしい」
 - ③「書くことがない」

(2) 相談に来る学生の不安

- ・第三者に伝わりやすい文章になっているか
- ・言いたいことが伝わるか、客観的に見てほしい
- ・読んだ人の印象に残るか
- ・内容が浅くないか
- ・私らしさが出ているか
- ・一般的な、つまらない文章になっていないか

(3) エントリーシートの難しさ

- ・正解がない
他人の真似、似た文章になってしまう
- ・自己の感情が書けない
- ・自己の体験等を具体化・深化して文章にすることが難しい

(4) チューターとしてのキャリア支援

- ・テクニックの指導ではない
- ・学生に対し「なぜ」を繰り返す
話す力の向上、面接練習にもなる
- ・「補助線」を引く役割
学生の一面的な考え方に、違う角度からヒントを与える
- ・親、教員、友人のいづれでもない存在

4. エントリーシート・レポートの共通点

- ・何かを主張するには、それを裏付ける根拠が必要
- ・プロセス、アウトラインが大事

- ・書けない理由
- ・文章力の不足ではない、資料不足や考えの深化が不十分

5. 個別相談以外の取り組み

①ライティング・カフェ

- ・昼休みや放課後に実施
- ・現在は、週2回英語のみで実施
(筆者注：本学の語学カフェ、語学学習カウンセリングに類似)

②冊子「レポートの書き方」の提供

- ・ライティングセンター教員・チューターで作成
- ・1年次生全員に1回講座を実施し、配布
- ・ホームページ (<https://twc.tsuda.ac.jp/system/upload/file/report.pdf>) からダウンロード可能

6. 課題

①学生を依存させないこと

- ・応用力のない学生に依存傾向が見られる

②各部署との連携

- ・学生支援部署、学生相談室など
ライティング指導のなかで、メンタル面の問題が顕在化してくることも多い
- ・正課との連携

③評価

- ・ライティング力そのもの、ライティング力の向上をどのように数値化、可視化していくか
- ・ループブックを使用しての評価は難しい

④今後求められる「ライティング力」

- ・読聴能力を含むライティング力
例：米スタンフォード大学“Center for Writing and Speaking” など
- ・プレゼンテーション能力やパワーポイント作成能力を含むライティング力
- ・AIの活用により、ライティングに正解が生じうる「AI時代」にどうあるべきか

アンケートから

- ・ライティングセンターの基本コンセプトがよく練られていて、大学全体として取り込んでいる様子はうらやましい。
- ・ライティングセンターは、アカデミック・ライティングの指導をしていると考えていたが、予想以上に指導の範囲が広く、キャリア系部門をと同様の業務をしているライティングセンターがあることがよくわかった。これと同様の運用を想定すると、担当できる教員が非常に限られ、どこの大学においても可能ではなく、各大学でセンターの目的を明確に定めた上で運営方法を決めていく必要があることがわかった。
- ・ライティングセンターといえば添削のイメージが強いが、紙ではなく人を成長させるという点に感銘を受けた。人間と人間が向き合うなかで共に成長するというライティング指導のありかたは素晴らしく、かつ指導者の人間力も必要とされると感じた。
- ・学生の悩みに共通性があることを実感した。
- ・テーマの面白さを感じた。
- ・複数のエピソードの関連性のなかからその学生の長所を見出すことについて、参考になった。
- ・書く力は読む力、考える力、全てにつながっていることに気づいた。
- ・実施場所や実施内容など、かなり具体的な話が多く、イメージしやすかった。
- ・津田塾大学のライティングセンターの立ち位置や学生への接し方が理解できたように思う。予約システムで定期的に利用される仕組みについて、良いと感じた。

- ・職員として学生からの書類確認にあたる際に、添削するのかどうか最初に定め、それを学生に対して明確に伝えることが大事だと感じた。
- ・学生本人に考えさせ、手を動かすようにさせているという点を具体的に伺い、参考になった。
- ・書く力を伸ばすセンターであっても、学生を成長させることが一番の目的であるという点は、職員として学生に対応する際に重要だと改めて実感した。

講演会の様子

基調講演



質疑応答



日時:2018年7月18日(水) 16:30~19:00
 会場:緑園キャンパス CLA 棟 4階 2405 教室
 (意見交換会: CLA 棟 3階 2303 教室)
 題目:アセスメント・ポリシーを考える
 ～コモン・ルーブリックの原理と可能性～

プログラム

16:30~17:30 基調講演
 17:30~18:00 質疑応答
 18:00~19:00 意見交換会(茶話会)

挨拶:秋岡 陽 学長(大学FD委員会委員長)
 司会:竹内 正彦 教務部長(文学部日本語日本文学科教授)
 対象者:専任・嘱託教職員
 出席者:学長
 教員 22名
 (英文4、日文4、コミュ2、国際6、音芸3、演奏1、留2)
 職員 17名

講演会チラシ


2018年度第1回・第2回フェリス学院大学FD勉強会
アセスメント・ポリシーを考える

**第1回
 ～コモン・ルーブリックの原理と可能性～**

●プログラム
 司会者: 専任専任・嘱託教職員
 日 時: 2018年7月18日(水)
 16:30~17:30 基調講演
 会場: CLA棟2405教室
 17:30~18:00 質疑応答
 会場: CLA棟2405教室
 18:00~19:00 意見交換会(茶話会)
 会場: CLA棟2303教室

**第2回
 ～授業デザインとシラバス作成～**

●プログラム
 司会者: 専任専任・嘱託教職員
 日 時: 2018年9月18日(火)
 14:30~17:10 基調講演
 会場: CLA棟2404教室
 17:10~17:20 質疑応答
 会場: CLA棟2404教室
 17:30~19:00 意見交換会(茶話会)
 会場: CLA棟2303教室

●第1回・第2回 講師
 東北大学 高度授業教育・学生支援機構
 教育評価分析センター 准教授
 **串本 剛** (くしもと たけし) 先生

講演紹介
 国際基督教大学50周年、広島大学で学位を取った。前部大学東京勤務を経て、現職。
 専門は高等教育論。学内の業務としては教務部に所属するが、全学の教務委員、教育情報・評価改善委員などに関わる。
 また社会貢献活動の一環として、フロンティア授業デザインセンターの所長として2014年度より他大学の大学で年2~3回実施。
 書籍
 『学評価』(2018) [第1回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第2回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第3回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第4回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第5回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第6回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第7回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第8回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第9回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第10回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第11回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第12回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第13回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第14回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第15回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第16回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第17回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第18回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第19回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第20回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第21回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第22回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第23回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第24回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第25回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第26回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第27回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第28回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第29回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第30回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第31回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第32回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第33回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第34回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第35回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第36回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第37回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第38回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第39回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第40回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第41回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第42回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第43回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第44回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第45回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第46回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第47回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第48回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第49回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第50回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第51回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第52回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第53回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第54回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第55回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第56回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第57回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第58回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第59回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第60回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第61回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第62回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第63回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第64回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第65回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第66回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第67回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第68回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第69回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第70回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第71回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第72回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第73回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第74回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第75回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第76回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第77回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第78回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第79回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第80回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第81回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第82回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第83回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第84回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第85回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第86回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第87回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第88回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第89回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第90回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第91回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第92回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第93回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第94回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第95回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第96回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第97回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第98回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第99回] 授業評価
 『授業評価』(2018) [第100回] 授業評価

アセスメント・ポリシーとは学生の学修成果の評価について、目的・質的水準・評価の実施方法を定めた学内の方針です。
 ルーブリックは学習項目を分け、その学習到達のレベルを数段階に分けて、それぞれの具体的な行動的特徴を示したものです。
 コモン・ルーブリックとは共通に用いる評価の指標(ルーブリック)のことです。
 上記は授業デザインの一つの観点、ツールです。授業デザインを場として込んだシラバスによって教員と学生が互いの期待を共有します。

基調講演

1. アセスメント・ポリシーとは

・変遷

(1) 研究者コミュニティでの議論(串本 2011)

学位プログラムを授業科目の相似形と捉えた場合、DPとCPがあるならばAPはアセスメント・ポリシー

(2) 行政文書での登場(中央教育審議会 2012)

用語集:「学生の学修成果の評価(アセスメント)について、その目的、達成すべき質的水準及び具体的実施方法などについて定めた学内の方針」

(3) 私学助成の要件化(進研アド 2018)

アセスメント・ポリシーの整備が、一般補助における教育の質に関する客観的指標のひとつとなる

・暫定的な定義

ディプロマ・ポリシーの達成如何を判断するために必要な情報の把握方法に関する方針

・アセスメント・ポリシーの類型

*累積方式:学修単位(授業科目)毎に成果を把握

カリキュラム・マトリックスの存在が前提となり、単位修得、GPA、ディプロマ・ポリシーポイント制があげられる。

*包括方式:複数の学修単位について成果を把握

アセスメント総体として全DPを網羅することが前提であり、卒業研究/論文/演奏/制作、実習、共用試験があげられる。

*混合方式:累積方式と包括方式を併用

日本の学士課程の殆どが、潜在的には混合方式である。

2-1. ルーブリックとは

・変遷

(1) 行政文書での登場(中央教育審議会 2012)

用語集:「米国で開発された学修評価の基準の作成方法であり、評価水準である「尺度」と、尺度を

満たした場合の「特徴の記述」で構成される。記述により達成水準等が明確化されることにより、他の手段では困難な、パフォーマンス等の定性的な評価に向くとされ、評価者・被評価者の認識の共有、複数の評価者による評価の標準化等のメリットがある。(後略)

(2) 専門書 (Stevens & Levi 2013=佐藤監訳 2014)

「ある課題について、できるようになってもらいたい特定の事柄を配置するための道具」(p. 2)

- ・暫定的定義
 - 評価の観点と水準を設定し、両者の交点に詳細な基準を記述した採点基準表
- ・前提
 - レポートやプレゼンテーションといった出来具合をデジタル(正誤)に判断できない課題に対応している。
 - *教員にとっての利点
 - 事前効果：課題の適切性を確認できる
 - 事後効果：効率的かつ公平に採点できる
 - *学生にとっての利点
 - 事前効果：何が求められているかを知ることができる
 - 事後効果：評価結果の理由がわかる
- ・具体的事例

レポート評価用ルーブリック				プレゼン評価用ルーブリック	
	優	良	可	研究の質	発表の質
全体	問いと答えが対応している	問いと答えの両方が明確	問いと答えの片方が明確	20点：テーマには独創性があり、分析結果や考察にも、文句の付けようがない	10点：見事なスライドが作られており、発表の練習も十分に行なわれている
序論	背景説明が客観的で共感できる	背景説明が客観的or共感できる	序論がある	18点	9点
本論	論述が丁寧で一貫性がある	論述が丁寧or一貫性がある	本論がある	16点：適切なテーマが設定されており、分析結果や考察は一応納得のいくものである	8点：スライドが丁寧に作られており、発表の練習も行なわれている
結論	わかったこととわからなかったことがわかる	わかったこととわからなかったことがわかる	結論がある	14点	7点
引用	正しい引用と書誌情報がセットで1点			12点：テーマ設定の根拠が不明で、分析結果や考察に明らかな矛盾がある	6点：スライドの完成度が十分とは言えず、発表の練習も不十分である

名 授業の概要 (週2回8週) 20
 10点分のレポートを3回
 相互評価の平均点を成績利用

名 授業の概要 (週1回15週) 21
 基礎ゼミ「社会調査入門」
 学生対象の調査を企画・実施
 調査結果を使って15分プレゼン

- ・シラバスとルーブリックの観点の違い
 - シラバス：授業全体の評価の観点
 - ルーブリック：課題の1つ1つの評価の観点

- ・演習①<個人ワーク>
 - 「卒業論文・卒業制作・卒業公開演奏及び留学生日本語を対象としたルーブリックの作成」
 - 作成時の諸注意は以下のとおり。

水準の数 (3~4) を決める
 観点の数 (3~5) を決める
 「水準の数+1」×「観点の数+1」の表を作る
 表頭に水準、表側に観点を書き込む
 最低水準 (可) について、各観点の基準を記述する
 最高水準 (10人に1人ぐらい?) の基準を記述する
 間にある水準に対応する、基準を記述する
 デジタルな判断の組み合わせでも良く、記述語を工夫し水準を明確に

2-2. コモン・ルーブリックとは

- ・コモンとは
 - 担当者の異なる複数授業科目での共有であり、それをルーブリックにも適用することである。
- ・共有の範囲

*学位プログラム内の共有

例：卒業研究，卒業研究につながる演習

*大学内の共有

例：初年次教育，外国語

*大学を超えた共有

例：全米大学協会の VALUE Rubric (AAC&U 2018) があり、各大学がアレンジして使用可能な 16 項目がある

・コモン・ルーブリックの利点

*学生にとって

授業担当者の違いによる不公平感が減じる

*教員にとって

課題の採点基準に関して自信が持てる

*学位プログラムにとって

同じ学修成果に係る授業科目の，段階的履修の効果が把握できる

必修科目における包括方式のアセスメントに利用することで，教育目標の達成を説得的に保証できる

・演習②<グループワーク>

「演習①で作成したルーブリックの共通性の確認」

ワーク時の諸注意は以下のとおり

同じ学科の教員 2~3 名でグループになる

先ほど作成したルーブリックを共有し，共通の観点 (3~5) を設定する

グループで同数 (3~4) の水準を決定する

「水準の数+1」×「観点の数+1」の表を作る

表頭に水準，表側に観点を書き込む

最低水準，最高水準，中間水準の順に，グループ内で共通する基準を検討し，表に記述

学科の DP との対応を確認

質疑応答

Q1

シラバスをきちんと整備し，到達目標だけでなく，成績評価基準を必ず書いている。

シラバスは科目毎にあり，シラバスとルーブリックの違いは何か。

A1

シラバス：授業全体の評価

ルーブリック：課題ごとの評価

Q2

串本先生の発表時に使用するルーブリックで最高評価が「見事」、一番下が「スライドの完成度が十分とは言えない」中間が「丁寧に」となっているが，文言が不統一で，見せられた学生は少し困るのではないか。

A2

このルーブリック事前に見せず，採点した後に見せている。学生の反応はわからない。

教員が直感的にわかりやすい表現を使っているが，学生目線で統一的な記述もよいし，採点者が使いやすいものでもよい。

Q3

講義で平等を勝ち取った黒人の歴史の話をし，レポート課題で白人至上主義のレポートが提出された場合はどうすればよいか。ルーブリックではレポートの思想的な質の部分が測れず悩ましい部分である。

白人至上主義的な内容でもきちんと書かれていれば正当に評価すべきかと思うこともある。というのも、学生のレポートとしての質が高いものもあり、ルーブリックであれば評価はいいが、最終的に授業評価という観点からするといかがなものかと思う部分もある

A3

レポートの観点は教員が判断すべき部分。重要な観点と思うのであれば、ルーブリックに入れるべき。どのような観点・論理でもまとめればよしとするか、論理が合っているでも結論を教員の希望する方向へむけたいのであればその方向づける観点をに入れても良いと思う。

ルーブリックの基本は学生へ「何を評価するか」を伝えることであり、良し悪しは教員の自由である。

Q4

授業の目的の方向を示し、その方向と「反対の結論を出したとしても評価する。」ということを最初に明記することでよいのか？

A4

評価基準に可能な限り明示できるものは入れ込み、先に学生に明示するのがよい。

想定外な課題提出があっても評価に迷った場合は、評価した結果を学生に伝えることで解決できる

アンケートから

- ・「ルーブリック」に関して、シラバスの「到達目的」や「成績評価基準」が明記されていることと、どのような相違があるか、受講するまではあいまいでしたが、レポート評価用ルーブリック、プレゼン評価用ルーブリックを拝見して、ようやく納得できた。
- ・ルーブリックの概念を理解した。その気になれば数分で作れる。
- ・レポートの採点は最初と最後で同じ評価をできているか不安だったが、序論・本論・結論…といった形で分割し、それぞれ優・良・可の基準を設ける方法は勉強になった。ただ「客観的で共感できる」の“客観的”は実証性で担保できるが、“共感”は教員の主観となるので“共感”の基準を明確化する必要性があるのではないかと思った。むしろ論理性という観点を入れるべきでは？
- ・演習形式をとることで、前半の講義内容を具体的なルーブリックの作成方法に落とし込むことができ、大変わかりやすかった。
- ・コモン・ルーブリック（教員同士の情報評価共有）はよかった。ためになった。
- ・ルーブリックを自分の言葉で説明しようとするとうまくできず、十分に理解ができていないと感じていたが、今日のお話を伺ってルーブリックが何かということに納得がいったように思う。ルーブリックもアセスメント・ポリシーも非常に分かりやすく勉強になった。
- ・言葉は知っていても、内容を知らなかったので大変勉強になった。
- ・フェリスの授業に関連して考えることができて有益でした。アセスメント・ポリシーはもっと勉強しないとのみこめていない気がします。
- ・例を見て、自分が評価にあたってこれまで意識していた点、そうでなかった点が明白になった。グループワークも同様であった。できればグループワークの時間がもっとあるとよかった。
- ・コモン・ルーブリックの作成の必要性を感じた。
- ・大きい意味での評価についても考えるいい機会になりました。ルーブリックを作成する順序など、How to 面も非常に参考になりました。ルーブリック評価を学生と共有する際の弊害（評価者としての教員という面が強化される!?)なども今後考えた上で、後期のシラバスをいま一度見直し、授業をデザインしていきたいと思います。
- ・学習者に口頭で伝え、その基準で採点していて、レポートの見本も教師が作成したものをわたしているので、ルーブリックの形ではないが、可視化できていると思う。日本語のレベルのこともあり、ルーブリックの示し方も理論の授業と語学の授業は異なると思った。（ある程度、暗記が必要な点もあるので）
- ・コモン・ルーブリックを可能な限り適確に作成するためには、学科内の熱心な話し合いが必須ということを再認識できました。

- ・ワークを入れることで、先生方がより具体的にイメージができていたようであること、また、直接、疑問点を解消することが、この勉強会の中でできていたようで良かったと思いました。
- ・アセスメント・ポリシー、ルーブリックについて、より具体的にその概念とどんなものなのかがわかりました。
- ・ルーブリック、コモン・ルーブリック、バリュー・ルーブリックの違い。ルーブリックは課題ごとに利用するものであること。学生・教員・学科それぞれにおけるメリット。先生方の意見交換がとても活発に行われていて、非常に有意義な会になったと思います。

講演会の様子

基調講演



演習



日時:2018年9月18日(火) 14:30~18:30
 会場:緑園キャンパス CLA棟 4階 2405教室
 (意見交換会: CLA棟3階 2303教室)

題目:
 授業デザインとシラバス作成 -授業アンケート結果を踏まえて-

プログラム

- 14:30~17:10 基調講演及びワーク
 17:10~17:20 質疑応答
 17:30~18:30 意見交換会(茶話会)

挨拶:秋岡 陽 学長(大学FD委員会委員長)
 司会:竹内 正彦 教務部長(文学部日本語日本文学科教授)
 講師:東北大学 串本 剛准教授
 対象者:専任・嘱託教職員
 出席者:学長
 教員 19名
 (英文6、日文2、コミュ3、国際4、音芸3、演奏1)
 職員 15名

講演会チラシ

2018年度第2回フェリス学院大学FD勉強会

アセスメント・ポリシーを考える

授業デザインとシラバス作成

-授業アンケート結果を踏まえて-

●プログラム概要

対象者: 本学専任・嘱託教職員
 日程: 2018年9月18日(火) @2405教室
 14:30~17:10 レクチャー&ワーク
 17:10~17:20 質疑応答
 17:30~18:30 意見交換会(2303教室)

●ポイント

①2018年度前期授業アンケート結果に基づいた振り返りを行います。
 ②『授業デザイン』の基礎を学び、③に基づき教員と学生双方にとってより良い授業デザインとシラバス作成について考えます。
 ③レクチャーとあわせて、個人ワーク/グループワークを通して実践的に学ぶことができます。

●講師

 東北大学 高度教養教育・学生支援機構 教育評価分析センター准教授
串本 剛 (くしもと たけし) 先生

講師紹介

同僚: 東北大学文学部准教授、フェリス学院大学文学部准教授、フェリス学院大学文学部准教授を歴任し、現職。専門は高等教育論。学内の空想としては教育学博士(教育学)取得。全学の高教職員、教務主任、評価改善委員などを歴任。

また社会実践活動の一環として、ワークショップ/教員研修/学生との対話(他)など、様々な場での大学の大学で年々3-5回実施。

業績

・串本剛 (2018) 『第11巻 高度教養教育の推進 - 高等教育評価と授業設計に関する可能性』

・串本剛 (2017) 『社会に開かれた高度教養教育を求めて』 東北大学出版会、357頁。

・串本剛 (2018) 『学生支援機構 教育評価分析センター』 学局FDセンターの構築と学局標準化推進の取組』

『東北大学高度教養教育・学生支援機構編年報』第4号、217-238。

基調講演の概要

1. シラバスについて

1-1. シラバス普及の経緯

現在では殆どの大学でシラバスが作成されているが、過去においては必ずしも一般的なものではなく、シラバス普及の発端となったのは以下の大学審議会(1991年)の答申であった。

学生の学習意欲の向上を図り、学習内容を着実に消化させるためには、大学の側において、教育の教授内容・方法の改善・向上への取組(ファカルティ・ディベロップメント)、授業計画(シラバス)の作成・公表、充実したカリキュラム・ガイダンスなどを積極的に推進する必要がある(222頁)。

その後も大学審議会においてシラバスに関する答申がなされ、2007年には以下のとおり大学設置基準にシラバス(授業計画)の記載が追加された。

大学設置基準第二十五条の二

1 大学は、学生に対して、授業の方法及び内容並びに一年間の授業の計画をあらかじめ明示するものとする。

1-2. シラバスの役割

シラバスは、学生が授業を選択する際の情報提供に留まらず、以下のように様々な役割を果たしている。

<学生にとって>

授業内容の確認: 期待できる事と期待される事を自覚

学修計画の参考: 必要な学修時間の予想と調整

<授業担当教員にとって>

学生との関係作り: 教育観を伝え、不幸な出会いを回避

<その他の人々にとって>

教育内容/水準の理解: 課程改善や単位互換で活用

2. 授業デザインについて

2-1. 授業デザインの3要素

授業を実施するに際して、事前に右図に記載された3つの要素を設定する必要がある。

2-2. 授業の目標

授業デザインにおいて、最初に設定すべきは授業の目標である。この目標は、あくまでも学生の成果に着目した目標であって、教授内容や授業展開に関する目標とならないよう注意する必要がある。また、目標とする学修の成果は、「単位修得の目安」を基準に設定する。

なお、目標は知識の修得だけに比重を置くのではなく、関心・態度といった多角的な観点から学生の成果を評価できるよう設定し、設定後には自大学のディプロマ・ポリシーや社会的な期待等と照らし合わせて、目標の妥当性を検証する必要がある。

※講演ではこの後、各出席者自身が担当する科目を想定し、「知識・理解」「技能・技術」「関心・態度」の3つの観点において、授業の目標を設定し、その後他の参加者と意見交換を行うワークを実施した。

2-3. 成績評価方法

成績評価は、上記2-2で記述した「授業の目標」に対して、学生がどれだけ成果を挙げることができたかを確認するものである。そのため、目標を多角的な観点から設定したのであれば、例えば知識の定着度は筆記試験から、技能はレポートや実技試験から、態度は授業参加状況から測定するといったように、目標毎に適切な評価対象を定める必要がある。また、学生には成績評価の規準、観点及び基準（ルーブリック）を明示することが望ましい。

なお、教育学では評価を以下の2つに分類する場合がある。

- ・総括的評価：学修の最後に行う評価であり、最終目標に対してどの程度の達成水準に至ったかを確認するもの。
- ・形成的評価：学修の途中に行う評価であり、現時点での成果を確認するとともに、今後の学修の在り方を考えさせるもの。

各科目の成績評価は、当該科目単体に着目すれば総括的評価となるが、学生の大学での学修が今後も続くことを考えると、形成的評価ということができる。

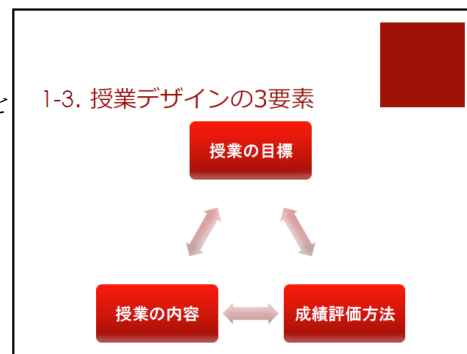
※「2-2. 授業の目標」でのワークの続きとして、自身の定めた目標に対する成績評価方法を検討し、その後他の参加者と意見交換を行うワークを実施した。

2-4. 授業の内容

授業の内容を決定するにあたっては、授業の目標を達成するために必要となる教育学修活動がどのようなものであるのかを検討する必要がある。その際は、授業で取り上げるテーマだけでなく、学生が授業の内外においてすべき学修を明確に定めることが重要となる。なお、学生に求める授業内外での学修内容を定めるにあたっては、1単位が45時間の学修から構成されていることを意識すると良い。なお、本学の2018年度前期授業アンケートの結果を分析すると、学生の授業外の学修時間が充分であるとは言いがたく、何らかの対策が必要である。

また、授業内では教員から学生への一方向の講義にとどまらず、能動的な学習を取り入れることが教育成果上望ましい。

※「2-3. 成績評価方法」でのワークの続きとして、授業内外での学修活動内容及び所要時間を設定し、その後他の参加者と意見交換を行うワークを実施した。



質疑応答

Q1

本学の授業アンケートへの取り込みや、アンケート結果について何か意見や感想があれば教えてほしい。

A1

多くの大学では、授業アンケートで得られた学生からのコメントを直接科目担当者に公開するのではなく、事前に所管の委員会等で内容を精査し、建設的な意見を抽出し科目担当者に伝えるという手法を採っている印象がある。そのため、そうしたフィルターを通さない現在の手法は珍しいケースである。

また、学生からのコメントに対して科目担当者から授業改善計画が寄せられているが、前向きなものが多い印象を持った。

Q2

授業の目標を設定する際には、単に知識の習得度合だけを指針とするのではなく、学生の「関心」についても目標を定める必要があるとのことだったが、この「関心」とは授業に対する関心なのか。それとも、授業テーマに関連する時事に対する関心なのか。

A2

授業に対する関心も、時事問題に対する関心も等しく重要であるため、両者の観点から目標を定めることが望ましい。

Q3

1 単位科目では 15 時間、2 単位科目では 60 時間の授業外学習が必要となるが、実際にそれだけの課題を学生に課した場合、学習時間が過多となり、生活に支障が生じるのではないかと。

A3

単位制度の想定と、実情が乖離しているためにこのような状況に陥っている。

1 単位を 45 時間と定めたのは、単位制度を制定した当時の社会人の週間勤務時間（平日 8 時間、土曜日 5 時間の計 45 時間）に準拠してのことだった。1 週間程度の学修量を 1 単位とし、これを前後期合わせて 30 週学ぶことで年間 30 単位となり、4 年間でおよそ 124 単位に到達するという制度設計だった。上記の想定に基付けは、1 学期あたりの履修単位数は 15 単位となるが、現状としては 20 単位を超える履修が一般化しており、これが質問事項のような問題点を発生させている。

なお、近年の玉川大学では 16 単位の CAP 制を運用しているが、この課題に対する 1 つの解決策と言える。

アンケートから

- ・自分が日頃から「なんとなく」作成しているシラバスや時間設定・成績基準設定などについて改めて考え直すきっかけになりました。
- ・シラバスチェックをした際に修正となるポイント、文科省提出(届出書類)の際に修正となるポイント(「シラバスに学修活動を明記する」、「授業の目標は学修成果を記述する」等)を講演とワークで確認することができ、次年度以降のシラバス執筆に非常に役立つ内容であったと感じた。
- ・自覚していない点や盲点について気づきがありました。
- ・成績評価方法の中で、目標と掲げているものと、その評価方法との整合的な関係という視点が参考になった。
- ・(本勉強会で使用した)ワークシートは利用できそう。シラバスをみる観点が広がった。授業設計をふり返る機会となった。
- ・前回同様、講義だけではなく、演習形式を採用することで、疑問点が明確になりやすく感じた。
- ・学生の学修時間の確保や単位数などの視点で大学設置基準と照らした場合の現状を勉強出来たように思えました。
- ・今後のカリキュラムやシラバスを記載するうえでの一視点となるように思えました。

- ・学習時間単位であり授業構成を考えたことがなかったので、非常に良い発想の転換になった。但し、今回自分自身が（本勉強会のワークで）使ったシラバスは調査法系の授業だったのでやりやすかったが、講義系科目はなかなかむずかしいのではないかと思った。
- ・講師の先生が現実をわかっていて、理想的すぎず、よかった。
- ・各講義において、開始時にその時間に関連する課題に取り込ませているが、内容定着のために、終了時にもコメントを書かせることも必要であると改めて思った。
- ・シラバスなりアンケートなりを改善するのは、最終的に学生の益になるのだということを学生が実感できるかどうか、という問題はあと思った。
 - ・学生が何を行うかを考える視点について考えられたのは良い機会だった。今後のシラバス執筆の参考としていきたい。

講演会の様子 基調講演



演習



4

学修行動調査

2018年度は第6回目となる Ferris 学修行動調査に加え、他大学と共同で行う ALCS 学修行動比較調査を実施しました。後者の調査からは本学の強み、弱みを浮き彫りにし、今後取り組むべき課題を明らかにすることを狙いとしています。

【Ferris 学修行動調査】

目的	(1) 学生の学修状況（学修時間の実態や学修行動）の把握 (2) 学修成果の把握及び教育の内部質保証
対象者	学部学生 2 年次生・4 年次生
実施方法	FerrisPassport のアンケート機能利用
実施期間	2019 年 2 月 22 日（金）～4 月 15 日（月）
回答率	第 6 回：20.5%（2019 年 2 月 22 日付在籍者数：1,251 名、回答者数：257 名） 参考：前年度同時期 30.5%（10 月 1 日付在籍者数：2,525 名、回答者数：771 名）
設問の概要	(1) 時間の使い方 (2) 授業での経験 (3) 学修への取り組み (4) 授業に対する意識 (5) 入学後から現在までの学修行動についての自己評価 (6) 本学の教育への満足度 (7) その他

【ALCS 学修行動比較調査】

目的	(1) 学生の学修状況（学修時間の実態や学修行動）の把握 (2) 学修成果の把握及び教育の内部質保証 (3) 他大学間との比較分析による現状把握
対象者	学部学生 1 年次生・3 年次生
実施方法	専用 Web サイト
実施期間	2018 年 10 月 12 日（金）～11 月 12 日（月）
回答率	第 1 回：40.0%（10 月 12 日付在籍者数：1,294 名、回答者数：518 名）
設問の概要	(1)経験（学修に関する経験） (2)時間（時間外の活動量） (3)成長（学修による変容の自覚） (4)満足（学修関連の満足度） (5)希望（学修に関連して望んでいること）

5-1 授業アンケートと授業改善計画

2018年度より新たな取り組みである授業改善計画を実施しました。授業改善計画は、授業アンケート回答に対する担当教員からの応答により、学生が自身の今後の授業への取り組み方や学修活動の振り返りにヒントを得ることを目的として開始しました。授業改善の参考資料として引き続き活用いたします。

【授業アンケート】

対象	全科目
実施方法	FerrisPassport の授業アンケート機能利用
実施期間	(前期) 7月6日(金)～7月27日(金) (後期) 1月4日(金)～1月28日(月)
回答率	(前期) 23.1% (後期) 15.2% 参考：2017年度(前期) 13.7% (後期) 7.1%

【授業改善計画】

対象者	全教員
実施方法	FerrisPassport のアンケート機能利用
実施期間	(前期) 7月31日(月)～8月24日(金) (後期) 1月30日(水)～3月1日(金)
提出率	(前期) 91.4% (後期) 87.7%

5-2 ルーブリック作成

中期計画 17-20 PLAN のひとつである「教学マネジメントに基づく教育支援」の「学修成果の把握」への取り組みとして、ルーブリックを作成しました。

具体的には、東北大学の串本剛准教授による「コモン・ルーブリックの原理と可能性」をテーマにしたFD勉強会を7月に実施し、その内容に基づいて各所管で検討した結果、文学部・国際交流学部の初年次教育及び文学部の卒業論文等でルーブリックが導入されました。また、国際交流学部・音楽学部の卒業論文等及びその他の科目についても引き続き導入の検討がなされています。

5-3 卒業生調査

学修成果の把握は現在の大学に求められている大きな課題であり、本学でも学修行動調査や客観テスト(英語)などで学修成果の把握と向上に努めています。

2018年度からは従来の取り組みに加え、卒業生という外部の視点からも本学の教育の成果・効果を明らかにし、本学に対する要望を把握することを目的として卒業生調査を実施しています。

アンケートの結果からは、本学の特徴であるリベラル・アーツの重要性が確認できた一方、より充実した語学教育の必要性が示されるものとなりました。

今後、本アンケートを継続して、カリキュラムの一層の充実を目指します。

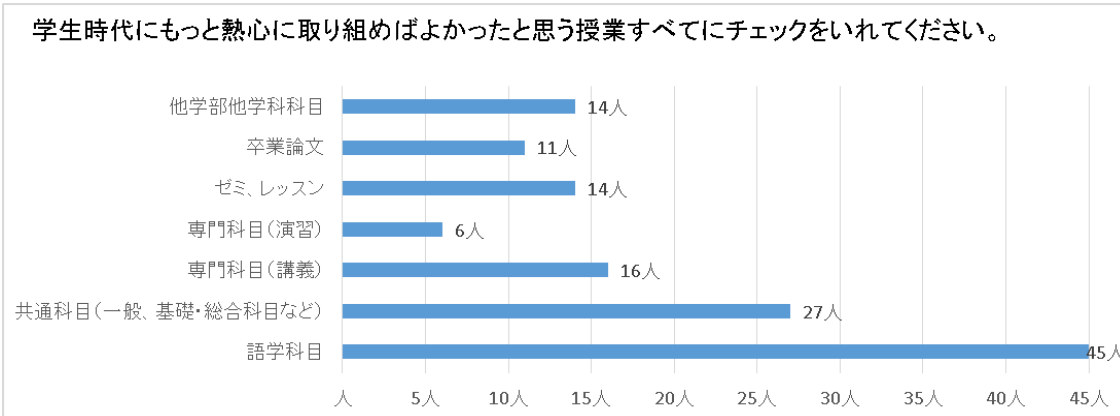
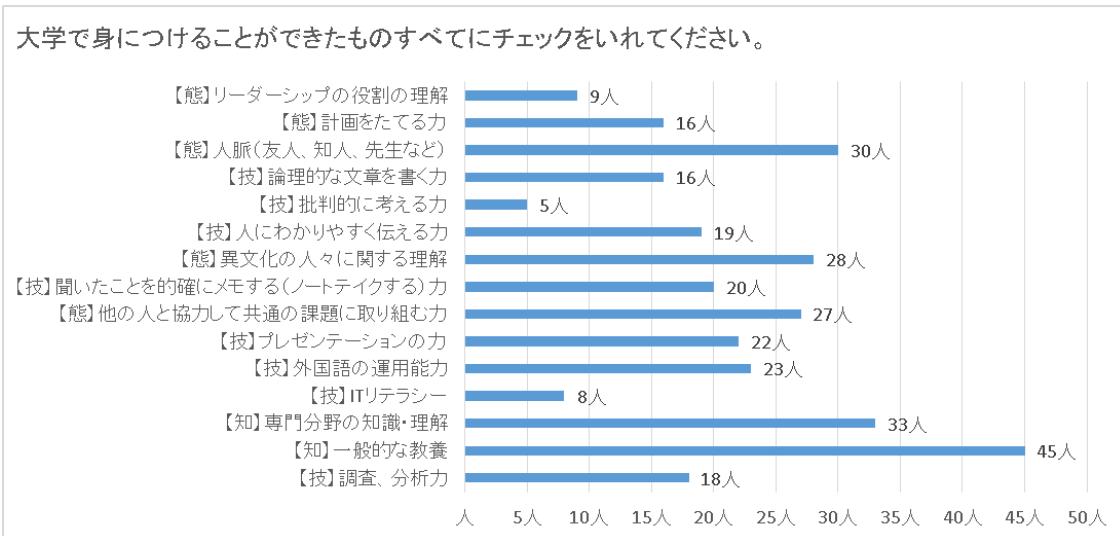
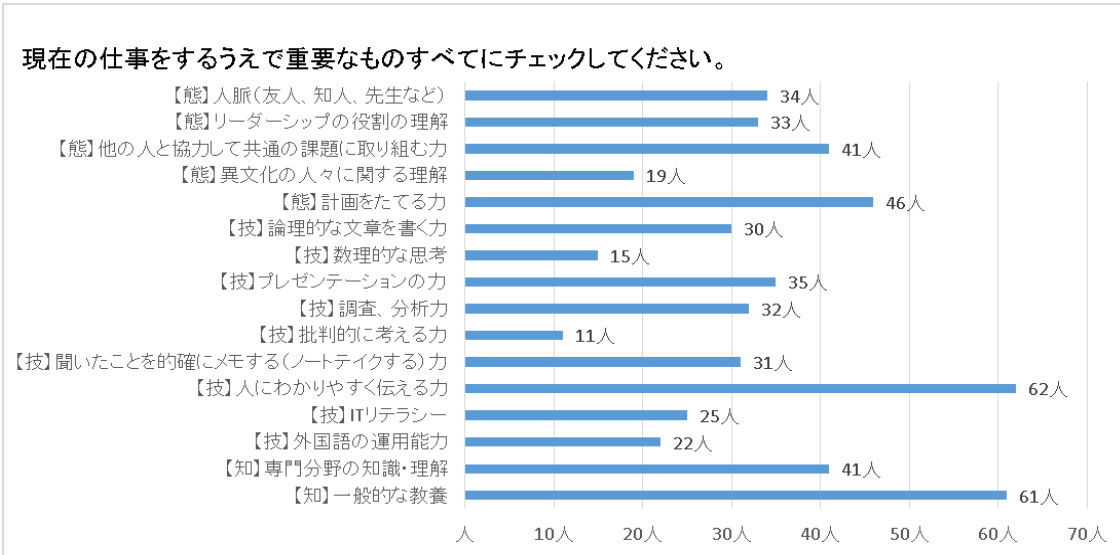
【調査及び結果概要】

実施期間：2018年7月12日～23日

実施方法：葉書で依頼し、webにて回答

対象人数：542名（2013年3月出学者）

有効回答：68名（回答率12.5%）



5-4

PBL 科目の推進

中期計画 17-20 PLAN のひとつである「PBL 科目の推進」として、PBL 科目における学生の活動経費（交通費等）の補助を制度化しました。

実施初年度である 2018 年度は、支援対象科目 6 科目（履修者数 78 名）のうち、申請のあった 2 科目・5 名に 11,278 円の支援を実施しました。

5-5

シラバス改善

2019 年度シラバス作成にあたっては、2018 年度に実施した 2 回の FD 勉強会 (pp.11-19) を踏まえ、授業内、授業外の両方においてどのような学修活動が必要とされるかをより明確にする方針としました。

単なるカタログではなく、担当教員の教育観を伝え、学生が履修科目と不幸な出会いをしないようなシラバスを目指しています。

6

2018 年度活動内容

期間	テーマ、トピック	主催
6 月 4 日 (月) ~6 月 22 日 (金)	専任教員による授業参観 (対象: 専任教員担当科目)	大学 FD 委員会
6 月 20 日 (水)	第 1 回 FD 講演会	大学 FD 委員会
5 月 29 日 (火) ~7 月 5 日 (木)	前期授業アンケート実施 (授業への要望)	大学 FD 委員会
7 月 4 日 (水)	第 1 回文学部 FD 勉強会	文学部・人文科学研究科 FD 委員会
	第 1 回国際交流学部 FD 勉強会 第 2 回国際交流学部 FD 勉強会	国際交流学部・国際交流研究科 FD 委員会
	第 1 回音楽学部 FD 勉強会 第 2 回音楽学部 FD 勉強会	音楽学部・音楽研究科 FD 委員会
7 月 6 日 (金) ~7 月 27 日 (金)	前期授業アンケート実施 (学生の自己評価・成長)	大学 FD 委員会
7 月 18 日 (水)	第 1 回 FD 勉強会	大学 FD 委員会
7 月	教育の質向上に向けた取り組み—卒業生調査	大学 FD 委員会
9 月 12 日 (水)	第 2 回文学部 FD 勉強会 第 3 回文学部 FD 勉強会	文学部・人文科学研究科 FD 委員会
	第 3 回国際交流学部 FD 勉強会	国際交流学部・国際交流研究科 FD 委員会

	第3回音楽学部 FD 勉強会	音楽学部・音楽研究科 FD 委員会
--	----------------	----------------------

期間	テーマ、トピック	主催
9月18日(火)	第2回FD勉強会	大学FD委員会
10月12日(金)～11月12日(月)	ALCS 学修行動比較調査 (対象：1・3年次生)	大学FD委員会
10月24日(水)	外国語による教授法FDプロジェクト④	大学FD委員会
10月27日(土)	Ferris English Teachers' FD Workshop	英語教育運営委員会
11月7日(水)	第4回音楽学部FD勉強会	音楽学部・音楽研究科 FD委員会
11月14日(水)	第1回留学生科目FD勉強会	留学生科目委員会
11月19日(月)～1月10日(木)	後期授業アンケート実施(授業への要望)	大学FD委員会
1月4日(金)～1月28日(月)	後期授業アンケート実施(学生の自己評価・成長)	大学FD委員会
2月22日(金)～4月15日(月)	第6回学習行動調査 (対象：2・4年次生)	大学FD委員会
4月～2月	教育の質向上に向けた取り組みーPBL科目の推進	大学FD委員会
7月～3月	教育の質向上に向けた取り組みールーブリック作成	大学FD委員会
12月～3月	教育の質向上に向けた取り組みーシラバスの改善	大学FD委員会

以上